

馬鹿

『遊子』第三十一号（二〇二四年十二月）掲載

春、といえは桜花びら散る下を親はらからに送られて旅立ちゆきしあの人も思いの丈の告白にごめんなさいで返されて東風吹く午後の校庭にひとり泣きいしあの人もかつて千里の丘の上みんな行くなら行かねばと集い来たりし人波の最中にありて父母に両手引かれて奇怪なる塔にぎろりと見下ろされ進歩と調和の未来へと遅き歩みを進めいし弥生吉日その日より数えてみれば半世紀余り五年を閲したる未来にありてまたしてもさらなる先の未来へといのち輝く未来へと本卦還りも過ぎし身で孫子と共に奇怪なる目が五つある妖かしの誘うがままに踏み行きし昭和生まれのあの人も卯月朔日四月馬鹿の嘘に騙されたふりする父に気づかないふりしてわざと得意げにうっそだーいとはしやぐ子を母ならではの微笑みで見守りおりしあの人も今はこの世にもういない。夏、といえはいそとせむそとせななそとせ八十年経ても巡り来る葉月八月十五日かつていくさに駆り出され異国の民と殺し合い無駄に死にたるはらからを祀り讃えるお社へ黒や鼠に身を包み数を頼みと列なして参りきたりし人たちも国の守りの捨て石となされし島に生き残り島人という石のまま親はらからのたましいや鬼畜の裔の兵士らと暮らしたりし人たちもかつて新型爆弾で焼けて爛れて死にゆきし親はらからの恨みをも背負わされつつ昭和より平成そして令和まで親はらからと同じ日に同じ新型爆弾に焼かれ爛れし自らの癒えぬ身体に鞭打ちて生き証人たる生きざまを強いられ生きし人たちも今はこの世にもういない。秋、といえは紅葉はおずき彼岸花夕焼け空より湧き出でて群れ飛ぶ赤きあきあかね思い出さるるふるさとの町を離れてようようにふたとせみとせ経しころに呼び出だされて神無月二十一日降りしきる雨の外苑競技場神も仏もあらざるを知るや知らずやいざ征かむいざ征かむとて出で行ける出で行かざる若人を行進曲と万歳で死出の旅へと押し遣りし同胞のすえ民の裔そのまた末の末のすえ勝った負けたと国どうし競う平和の祭典に勝つてくるぞと出でゆける好きで戦う若さらに赤き丸のみ描きたる旗を負わせて勝つてこい勝つてこいよと送り出し勝つて帰ればばたと赤き丸のみ描きたる小旗振り振りにぎやかに出迎えくれし自らは戦い知らぬ人たちも今はこの世にもういない。冬、といえは雪のきさらぎ二・二六よとせいつとせたちまちに過ぎて師走の南京や真珠湾での勝ちいくさ勝った勝ったと外つ国の民虐げし兵どもや身を棄て果てし軍神ら崇め讃えて提灯を掲げて軍歌高らかに鳴らして街を練り歩き挙げ句の果ての負けいくさごめんなさいと総懺悔したのはどこの誰だっけもうすぐ春の三・一一明るい未来の何とやら天の災い蒙りて見えざる毒を撒き散らす炉より逃れて口々にまちがいでしたと総懺悔したのはどこの誰だっけ生き永らえて新しき時代にいつか来たような気もする未来への道をそろりそろりと一歩二歩やがてこぞりてずんずんと歩みてゆきし人たちも今はこの世にもういない。春、といえは四月一日四月馬鹿時超えてきし破れ船の生き残りなる未来人われの語れる物語り過去から見ればまだ何も決まらぬままにやがて来る未来いかほどにも遠からず。花散るや誰もこの世にもういない。